

本日はようこそご来場下さいました。そして「おうちでプリモ」の配信をご覧下さいまして、ありがとうございます。

曲について少し書きたいと思います。

ベートーヴェンは作品番号が付けられているものだけで7曲のピアノ三重奏曲を作曲しました。本日お聴きいただく変ホ長調のものはその6番目にあたり「幽霊」の通称で知られるニ長調とともにOp.70として1809年に出版されました。1809年と言えば交響曲「運命」「田園」の直後、まさにベートーヴェン絶頂期の作という事になります。

ベートーヴェンは「幽霊」とこの変ホ長調の2曲を、意識して対照的なものとして作曲しているのは間違いないでしょう。「幽霊」はその名の通り極端に遅く不気味な緩徐楽章を、速く、非常にエネルギッシュな第1楽章とこれまた急速で機知に富んだ第3楽章が挟むという、曲想も速度もかなりメリハリのある楽章構成となっている一方、この変ホ長調では全楽章に渡って上品な中庸さ、またユニークな楽章構成、そして全曲を通じての美しいメロディーの数々がその特徴と言えます。

全体は4つの楽章からなっています。

第1楽章は序奏を持つソナタ・アレグロ楽章で、素晴らしい展開部を持ち、また再現部への滑り込ませ方など工夫がふんだんに凝らされており、終わり近くにも序奏部の一節が現れます。第2楽章は緩徐楽章と思いきや速度はアレグレットで、調性は意外にも柔和なハ長調、しかも対照的なゴツゴツとしたハ短調のエピソードを持つという、複合的な楽章で、最後はなんとハ短調のままフォルテで終わります。第3楽章はメヌエット風の変イ長調で、美しいメロディーがヴァイオリンとピアノで交互に(チェロには残念ながら一度も回ってきません)歌われます。速度表記はアレグレット・マ・ノン・トロppoで第2楽章より遅く、むしろこちらの方が曲想としては緩徐楽章的とも言えます。さらに書くと主調が変ホ長調の曲で緩徐楽章が変イ長調であるのは通例です。ロマン派の作曲家なら「間奏曲」とでも名付けたでしょうか。第4楽章は生き生きとしたものですが、各楽器の扱いにも非常に工夫がある、充実した楽章です。ヴァイオリンの長いスラーで移弦を伴う印象的なフレーズや、チェロが高音部で華やかに活躍する部分など、各所に「見せ場」があるのも特徴です。

ブラームスのピアノ三重奏曲はこれまた作品番号を持つもので3曲あります。どうしてわざわざ「作品番号をもつ」と書くのかと言うと二人ともそれ以前に習作を書いているからです。

ブラームスのこの第1番Op.8はもともと1853年、ブラームス20歳の作品です。なぜ「もともと」と書いたかと言うと本日を含め今日一般的に演奏されるのはその37年後、1890年に改訂された版だからです。ブラームス自身「少しばかり櫛を入れて髪を整えただけです」と言っていますが、それはかなり控えめな言い方で実際はかなり大幅に手を加えたものです。1890年と言えば4曲の交響曲を書き上げた後のブラームス晩年に差し掛かった時間にあたります。このようなわけで、この曲は3曲のピアノトリオの中で最初に書き始められ最後に完成した、言い変えると若々しい素材を円熟した筆致で仕上げた、他に類を見ない独特の魅力を持った傑作となったのです。

4つの楽章からなっており、第1,3楽章がロ長調、第2,4楽章がロ短調であるのが特徴です。

第1楽章は大規模なソナタ・アレグロ楽章。冒頭のピアノ、チェロ、ヴァイオリンと弾き継がれるメロディーは一度聴いたら忘れられないでしょう。第2楽章は速く技巧的なスケルツォですが、聴きどころはテンポを落として雄大なメロディーが朗々と歌われる中間部かもしれません。第3楽章アダージョはコラール風で瞑想的な美しい楽章で、3つの楽器の親密な対話が繰り広げられます。第4楽章は前述したようにロ短調ですが、6度の和音で不安定に始まり、なかなか主和音が聴こえてきません。緊張感と高揚感が縋い交ぜになって音楽は進み、圧倒的なクライマックスを形作ります。

本日はこの、ピアノトリオの名曲2つを、青春を共に下町のアパートで過ごした3人のオヤジが熱演します。

皆様、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。